

下関短期大学開学50周年記念講演 講演記録

## 江戸文化再考

— 急ぎすぎた近代化への疑問 —

九州大学名誉教授 中野三敏

---

Lecture Text of the Special Lecture Commemorating  
the 50<sup>th</sup> Anniversary of Shimonoseki Junior College :

### Reflections on Edo Culture

— Modernization Having Come Too Early —

by

Mitsutoshi Nakano

---

ただいまは大変ご丁寧な紹介を頂きましてありがとうございます。  
また本日は、下関短期大学の開学五〇周年というおめでたい席に  
お招き頂きまして本当にありがとうございます。

それから、こちらの開学からの教育方針は、「温雅礼節」という  
ことであると伺いました。

私どもが研究しております江戸時代と申しますのは、実はこれま  
では最も近代的ではない非近代的な事柄の権化のような扱いをずっ  
と受けてまいったと思います。しかし、最近になってようやく江戸  
というものに対して何がしかの目が向けられているようでもござい  
ます。

例えば「江戸しぐさ」と呼ばれる、生活の細やかな心配りとも  
申しますか、そういうものがかかなり見直されてきているということ  
もあります。この「江戸しぐさ」に関しましては、特別なものが具  
体的にあるということでもございませぬようで、まさしくこちらの  
「温雅礼節」と申しますか、それがそのまま江戸しぐさそのもので  
あるだろうと思います。ですからこちらの学生さん方は皆さん始め  
からそういう「江戸しぐさ」というようなことをモットーとしてお  
暮らしになってこられた、ということに誠に何よりのことだと思っ  
ております。

私が実は今日お話ししたいことは、実のことを申し上げますと、もうこの十年近く私はこのことだけをずっと話をしてまいりました。但し、私どものようなものが書きます事柄は若干読者層が偏っているので、あまりお目に触れることもなかったのではなからうかと思えます。しかし、私自身はとにかくこの十年近く、本当にこのことだけをお話をしてきた。そして今後まだまだもうしばらくはこのことをお話をしていかなければならぬだろうと、思っております。

そういうこともありまして、もしかするとどこかでお目に触れているかもしれません。しかし、それはそれで、何回お聞き頂いても大事なことは何度申ししても宜しいわけでございますので、そういうつもりで今日はお話をさせて頂きたいと思えます。

資料として二つほどお配りしていると思えます。一つは「下関短期大学開学五〇周年記念講演」という大変汚い字で（私は字が下手で誠に申し訳ないのですが）「江戸文化再考」、そして「急ぎすぎた近代化への疑問」という題名と副題をつけて、掲げさせていたいただきました（**当日配布資料4参照**）。これは「江戸文化再考」という言葉でもわかります通り、これまで江戸の文化というものに対して、大変偏りすぎた理解が当たり前として通ってきてしまっていた、それをもう一回考え直そう、ということでございます。内容的に言えば、日本という国はあまりにも近代化を急ぎすぎたので

はないか、そういう視点が、江戸の文化をもう一回考え直してみよう、というときの非常に大きな意味になってくるだろうと思えます。実は、江戸の文化に関しましては、先程もちょっと申しましたようにあまりにも誤解された面が多すぎた。その誤解を何とか解きたいということが一つにはございます。



中野三敏先生（平成24年11月10日）

それともう一つ、こういう何か不思議なものがお手元にまいてありますでしょうか。その原本はここにございます。こういうものがございます（**本を掲げる。写真参照**）。

表紙には「見附絵合」（みつけえあわせ）と墨で書いてあります。「大変汚らしい、何かネズミのかじるにまかせたような……」と思われる

方もいらっしゃるかもしれません。しかしこの本をもとに、みなさんに、ちょっと遊んで頂いてから本題に入ろうかと思えます。

そういうつもりでこういうものを用意いたしました（**当日配布資料1〜3参照**）。これは、江戸時代には非常によく行われた子どもの遊びでありまして、現代のテレビでもよくやります「テーブルマジック」というものがありますね？ テーブルの上で人が見ている

目の前でやるマジック、そのテーブルマジックの本というふうにお考え下さればよろしかろうと思います。この本をコピーをいたした資料が、お手元にまいておられると思います。配布資料は一枚が上下二段になっておりまして、その上下二段のものが三枚あるはずでございます。この遊び方を今から説明します。どうぞ覚えてお帰り頂いて、お孫さんなり、あるいは弟さんか妹さん、子ども達と遊んで頂くと案外、江戸のおもしろさにも、気が付いて頂けるのではなからうかと思えます。

実は一枚目の上の段、本では最初の見開きになる図が一番素になるものでございます(当日配布資料1、上段参照)。このなかで、これは、右から左へずつと一つのコマの中に一つずつ番号がふつてあります。一(恵比寿)、二(鍵)、三(福祿寿)、四(隠れ蓑)、五(弁才天)、六(綾錦)、七(珊瑚珠)、八(鶴亀)、九(黄金)、十(大黒)、十一(枳)、十二(布袋)、十三(弓矢)、十四(猩猩)、十五(宝剣)、十六(依)、十七(毘沙門)、十八(珠)、十九(吉祥天女)、廿(壺)、廿一(寿老人)、廿二(隠れ笠)、廿三(歳徳神)、廿四(扇)、廿五(袋)と、二十五種類の「コマ絵」があります。そして漢数字で全部番号が付けてあります。この中身はみんな「おめでたいもの」、江戸時代の人たちが自分たちの身の回りでおめでたいと思われるようなものが、入れてあります。例えば、桃太郎の

話がありますが、鬼ヶ島にいきますと、隠れ笠・隠れ蓑、即ちそれを着ると透明人間になってしまうような笠や蓑を持って帰りますね?あるいは宝物、例えば宝珠という宝物であるとか、大きなお蔵の鍵であるとか。そういうおめでたいものばかり集まった「めでたいものづくし」が二十五種類、ここにあります。

遊び方はまず、この中でどれか一つだけ、自分で「あーこれ」と思ったものをつだけ頭の中に覚えて頂きます。そしてその図は何番ということが絵の上を書いてありますので一緒に覚えて頂きます。

例えば九番ですと、大判小判があります。それから一番ですと恵比寿様ですね。恵比寿というのは一番おめでたい、七福神の最初になるような人ですから。恵比寿、十番の大黒というようなのが、まずはおめでたい。一番が恵比寿で、そのすぐ下の九番が黄金、大判小判という、そういうものが全部ある。とにかくどれでもよろしいですから、自分で「これ」ということをまず頭に置いて頂く。そしてそれは決して人には言わないのです。

次から、本格的な遊びに入ります。原本ではページをめくって次の見開きですが、プリントでは下の段を見て下さい。

そうですね、実際にどなたかお一人、やってみて頂きますでしょうか?

(会場から一人立ち上がる)

はい、それでは、どれか一つだけ覚えて下さい。

そしてその下の段にいきます。下の段には右側の方に「右一」、左には何にも数字が書かれていません。そして全体の絵を見て下さい。このなかで、あなたが「これ」と思われたものは右側にありますか、左側にありますか？

(会場参加者)「右にあります」

右ですね。じゃあ、その次に行きましょう。

今度は二枚目の上の段を見て下さい(当日配布資料2、上段参照)。

右側にありますか、左側にありますか？

(会場参加者)「右側にあります」

じゃあ、二枚目下の段では、それは右にありますか、左にありますか？

(会場参加者)「左にあります」

はい、分かりました。三枚目に入ります(当日配布資料3参照)。

三枚目上の段、今度はどちらにありますか。

(会場参加者)「右にあります」

はい、右ですね。そうすると三枚目下の段、これは右側だけですけれどもこれはどこにありますか？ 右にありますか、ありませんか？

(会場参加者)「右にあります」

ありますか。はい。そうしますとですね、最初から繰り返します

と一枚目下のところでは、右にあるということでした。二枚目の上の段はこれは右にあるということですかね？

(会場参加者)「はいそうです」

はい。二枚目下の段は左にある？

(会場参加者)「はい」

はい。三枚目に入って上の段は右にある。下の段も右にある、いうことでもあります。そうするとあなたがお考えになっていたのは、「廿一番」。「廿一番」の寿老人、それでしょうか？

(会場参加者)「その通りです」

はい。というふうに当てるわけです。遊び方がお分かり頂けますでしょうか。(会場、感心した溜息がもれる)

当てることができた種明しをしながら遊び方を振り返りましょう。まず、相手に一枚目上、一〜廿五までの絵の中からどれということを考えていただいて、そしてその番号をまず覚えて頂く。そして一枚目の下の段以降はずっと「右にありますか、左にありますか」と聞いていきます。すると右の方にだけ数字が付いております。ですから、右にあると言ったときには右の数字、一なら一、二なら二をずっと足していけばよろしい訳です。左にあるといった場合は、左は数字がありませんので左はゼロというふうにして頂ければよろしいのです。それで、右にあると言ったものだけ、その数字を足し

ていきます。

今の場合には、右の一、右の二、それから右の八、右の十、ということになりますので、合計二十一(廿一)。従って「廿一の寿老人になる」という風に遊ぶ訳です。

この本の場合には、「宝づくし」の絵でしたが、その他にも役者の似顔絵が描かれたものもございます。当時としては、人気役者の似顔絵、今風に言えば、プロマイドですね。プロマイドを並べてそれを当てさせるといふようなこともできるようになっていました。こういう本が大体三百種類以上できていたと思います。

ですから子どもの遊びとして、テーブルマジックのようなものがすでに江戸時代から盛んに遊ばれていたということは、これで良くお分かり頂けるだろうと思います。

これはちょっととした遊びですが、こういうものから子どもさんの興味を引いて幼稚園などの現場から、江戸時代をはじめとした伝統的な世界に何となく興味を持ってもらうというようなこともできることではなからうかと思えます。

それでは今日の本題に入らせて頂きます。今日の本題は、こちらの資料ですね(二三頁の資料写真参照)。写真資料ですが大変きれいな仮名文字が出てまいります。これを御覧になって、これが何で

あるのか、思いつかれる方は、なかなかいらっしやらないだろうと思えます。これは手紙です。これを御覧になるとみなさん方は「もしかするとこれは平安朝の紫式部か何か書いたようなものではないか」と思われるかもしれません。しかし、実はこれは明治時代に活躍した樋口一葉(小説家、一八七二〜一八九六)の手紙なのです。樋口一葉の時代は、まさに夏目漱石が活躍した時代でもあります。樋口一葉の時代ですが、これは今からほんのついこの前の時代ですよ。しかし、今、こういう文字を読める人が一体何人いるかということ。これは樋口一葉ですから同時代の、福沢諭吉にしても勝海舟にしても皆こういう文字で書いていたわけです。例えば、福沢諭吉の『学問のすすめ』というのは現在でも大変有名な書物です。『学問のすすめ』も皆こういう文字で書いてあります。それを読める人が果たして日本中で何人いるのかということ。恐らくここにいらっしやる方々はほとんど「これはちょっと難しい」、「これは読めないな」とお思いになるに違いないと思うんですね。まして若い方々は、そもそもこういう文字で書かれていたということと自体をほとんどご存じないのではなからうかと思えます。

実は、今、平仮名は必ず一音一字で書くようになっております。つまり、「あいうえお」なら「あいうえお」、「あ」という音にあたる平仮名は今普通に使う「あ」という一字だけになっている訳です。

ところが当時使用されていたのは、「あ」と読む文字だけでも五つも六つもあったのです。ですから「あ」という文字が五つも六つもあるとすれば「あいうえお」の五十音、五十音の五倍から六倍という数の平仮名（変体仮名）が江戸時代にはごく当たり前に使われていた。それは江戸時代だけではなく、実をいうと明治三十三年まで全部こういう文字で書かれていたのです。つまり、明治三十三年以前に書かれていた書物は全てこういう文字で書かれていた。

今、大変古典が大事だということが盛んに言われます。

ではその古典を我々は何で読んでいるのか。みんな活字になったものでしか読めなくなってしまうている、というのが実情です。

これは樋口一葉の手紙ですが、実は岩波書店から一葉の日記と手紙をまとめた書物が出ております。それにも全部平仮名で読みがつけてあります。

配布資料は一応、誰の書いたものか考えて頂くために活字の部分は消してしまっておりましても、岩波書店の本には一葉の書いた原物の写真だけでなく活字化された文章も掲載されています。

そして私は当然のこと、樋口一葉の専門家がこの活字化を担当しておられるとばかり思っておりました。ところが実は我々と同じ江戸文学をやる方が担当しておられる。「樋口一葉の研究者や専門家をどうして使わなかったのですか」と出版社に聞きましたら「どな

たも手をあげて下さらない。」ということでした。つまり樋口一葉の研究者も、すでにこういう文字が読めなくなってしまっているという実情があるわけです。これは矢張り大問題ではなかるうかと私は思います。

そして、「こういうものは活字で読めばいいんだ」ということが当たり前になってしまった。活字で読むということは、これはかなりきつい言い方をすれば、例えば翻訳を読んでいるのと同じことなのです。既にお分かりだと思のですが、この資料のなかにはほとんど句読点がありません。それから濁音も見あたらないと思います。ほとんど清音。例えば「がぎぐげご」が濁音、「かきくけこ」が清音ですね。清濁の区別が全くない。明治三十三年までは、それが当たり前だったのです。

ところがこれを活字化しますと、清濁を付けて、それから句読点を付けて、それで初めて読めるわけです。そうなると原著者以外の他人が判断したものを読むことになる。それはもしかすると、もちろん一生懸命責任持って付けておられると思いますが、間違っているかもしれない。場合によってはミスプリントということもあります。だから「ためになる」といえば「為になる」ことですけれども、「だめになる」といえば全く逆の意味になるのですね。そういう間違いが、あるかもしれない。つまり、明治三十三年以前に書かれた

物を活字化された状態で読むということは、誰かによって翻訳された日本語を読んでいることになる訳です。

我々は古典を非常に大事なものだと考えて、「古典は大事だ」と言いながらも実は翻訳で読んでいる。

だから、活字化された古典を読むのはアメリカ文学やイギリス文学を翻訳で読むのと同じことなのです。せめて日本でできたものであるのならば、何とか原本で読めれば読みたいものだと思うのが当たり前だろうと思います。例えば、アメリカの小学生は十八世紀の独立宣言（一七七六年可決）を小学生でも必ず読めます。十八世紀ですよ。もう三百年前の話です。それでもきちんと読める。先程言った福沢諭吉の『学問のすすめ』、あれは明治に入ってからのものですね（明治五〜九年刊）。それをそのまま読める人が果して何人いるのか。ほとんどいないのです。これは読めないのがむしろ当たり前前なんです。というのは一回もこのような仮名文字（崩し字）を習ったことがないわけです。小学校をはじめとした学校教育で、習わなければ読めないのがむしろ普通で当たり前です。だから、それをどうするかということは、実は大変簡単なのですが、それは最後に申します。

そういう状態でここまでできてしまっている。例えば、私は九州大学の名誉教授ということになっていますが、私の知っている限りで

九州大学には先生が恐らく五千人ぐらいおります。五千人の内でのういものを普通に読める人が何人ぐらいいると思われれますか。「大学の先生だったら大体、誰もが読めるんじゃないかろうか」と思っておられるでしょう。けれども、どう考えてみても読めるのはせいぜい五人です。五千人の中の五人ですよ。明治三十三年以前の書物になると全くといっていい位、皆読めないことになります。自然科学の先生はそんなものは読めなくても全く構わないし、社会科学の先生もほとんどお読みになりません。かろうじて文学部の国語学・国文学、あるいは歴史の先生、そういう方々を九州大学のなかで勘定しても五人、六人が実情です。

これは日本中の国語、歴史関係の研究者を勘定してもまず、三千人から五千人というところだと思えます。そうすると日本の人口の〇・〇〇四%ぐらい。ということはよく冗談口で「それは九分九厘だめだよ」というようなことを申します。まさにその九分九厘、九割九分九厘九毛ぐらいますがもう今や、こういう文字を読めなくなりました。これは先程から申しますように教わらないのですから、要するに読めないのが当たり前。

なぜそういうことになってしまったかということがまさに「急ぎすぎた近代化」というものの危なっかしさであるだろうと思います。最近になってようやく、先程もちょっとお話ししましたように



江戸しぐさを含めた江戸のことに對してかなり視線が向いてきた。これは最初はエコロジーというような分野で注目されはじめたように思いますが、その後、九・一一による問題。あるいは三・一一が引き金となった原子力問題。現代の世界がいかに危なっかしいものであるのか。「人間が誰も四十万年入れないというような状態を作り出してしまったのが近代だ」。ということになりますと、これは近代というものがもつ危なっかしさがより分かるようになってきた。

我々の学生時代まで「近代的」という言葉は、ほめ言葉以外に使われたことはなかったのです。「あなたはとっても近代的なお考えの持ち主ですね。」あるいは、「大変近代的な生活をなさってますね。」といえどそれは褒められたことにしかならなかったのです。しかし、その近代化というものがちょっと問題がある、ということがはつきりしてきたというのが実情であるだろうと思います。

それでは何故そういうことになったのか。それは、先程から申しますように明治三十三年に「急ぎすぎた近代化」の発端ができてしまっていると思えます。

その一方で、明治三十三年には実はそうなるべき理由というものをはっきりあった。それは、明治三十三年の時点で日本人の子どもの約九割が尋常小学校止まりだったということです。尋常小学校というのは四年制です。ですから四年間しか学校で勉強をしない。そ

うなると確かに一音で五字も六字もあるような平仮名を覚えろという方が、若干無理なところがある。従って、平仮名の一音一字に加えて、漢字も活字のような形にする。できるだけ読みやすくすることを考えるというのは、その時点では少なくとも大英断であったと私は思います。そして、それによって確かに日本人の識字率は驚異的に上がりましたし、そういう合理化によって日本の近代化も非常に進んだ。それは大変よく分かります。

ただし、今はもう明治三十三年の時代と比べますと、就学率も上がり、九十パーセント以上の子どもが高校に進学する時代になりましたので、もう全くそのベクトルが逆になっているというふうに申し上げてもよろしいだろうと思います。

ついこの間（平成二十四年十一月二日）の田中真紀子文部科学大臣の記者会見に「戦後、大学が沢山つくられてきたが、量より質が重要」という話もありましたが、とにかく大学は数が多すぎるということまで話題にされるようになりました。今の場合は大学進学率がまだ五十%台六十%近くということになっておりますが、「どこでもいいからとにかく入れるところに入る」ということであれば、これはもうほとんど百パーセントといってもいい程の大学の就学率が、今やもう約束されている。そうなるとベクトルは全く逆です。だから当然のこと、そこで明治三十三年とは逆の文化行政が行な



われて当たり前のことなのではなからうか。私にはそう思えてくるわけです。

そして仮名を一音一字にした理由は、識字率向上の為の一つだけではなかったと思います。明治以来日本という国の近代化願望というものは大変強烈でして、次第次第に今のような状況が起こってきましてしまっている。これは一つの時代の流れとしては当然であつたらうと思いますが、その流れを若干ご説明したいと思います。

ちょっと言い忘れましたので、もう一つ。明治以前の書物で、大事なものはほとんど活字になっている筈と思っていらっしゃる方が多いのではないと思いますが、実際には私は精々1%か2%にすぎないと思っています。

そもそもどれだけの文献が出来ているのかは、誰にもわかりませんが、多分二百万点から三百万点かと思います。その内、現在活字化されているのは一万から三万点にしかならないでしょう。

これは、もう少し詳しく言うべきですが、時間もかかりますので、出来るだけ大まかな数字にします。しかも大事だとする根拠は、これまでの感覚ではまさに近代化の視点で判断されたものだけになりますので、うんと片寄ってしまいます。

それでは時代の流れについてお話しします。まず配布資料の最初の

ところに「従来の江戸観」と書きまして、そして「坂本龍馬風 江戸観」、「福沢諭吉風 江戸観」、「御雇い外国人の見た江戸」ということを挙げておきました(当日配布資料4参照)。

坂本龍馬というのは今でも大変な人気です。まあ坂本龍馬人気というよりは福山雅治人気だといったほうが早いのもかもしれません。

(会場、笑いがおこる。注 平成二十二年NHK大河ドラマ『龍馬伝』にて福山雅治が主役の坂本龍馬を演じた)

一般的な坂本龍馬のイメージといえば大体、汚い羊羹色の着物に袴を着まして、天の一角をにらんで「さあこれからが日本の夜明けだ」と言いながら前を見つめる姿ではないかと思えます。それが坂本龍馬風の江戸観を集約した姿だろうと思います。

しかし、「これからが日本の夜明けだ」ということは「これまではどうだったんだ」ということになります。つまり、これまででは真夜中だった、ということなんです。これまでというのはつまり江戸です。江戸時代というのは明治の人たちにとっては坂本龍馬にとってもまた福沢諭吉にとっても真夜中だった。

福沢諭吉は「封建制は親のかたきだ」という具合に申しました。封建制というようなことも含めて、とにかく全て江戸が悪い、真夜中の時代だったんだというふうを考えられてきたのがまさに明治の最初の出发点でした。

ところが、明治の時代に江戸は真夜中の時代と考えた人、つまりこれから近代の夜明けだと考えた坂本龍馬にしても福沢諭吉にしても、その時彼らが一体いくつだったのかということを考える必要があります。まさか三歳や四歳の子どもがそんなことを言うはずはありません。福沢諭吉（一八三四年生）にしても坂本龍馬（一八三五年生）にしても、江戸時代の天保（一八三〇～一八四四年）の生まれです。ということは明治元年（一八六八）には二十歳以上の人なのです。つまり、物理的に二十歳まではどっぷり江戸の人間として江戸の教育を受けて、そして江戸の人間として人間形成を行ってきた人たちがばかりだということですね。

江戸時代に成人した人たちが「とにかく江戸から何とかして抜け出さなければいけない」ということを考えたわけです。これは資料の「大勢五転」と書いた次に「明治」と書いておきましたけれども、これが最初の転換にあたるわけです。

明治の人たちの感覚というのは、「近親憎悪的な江戸否定」。近親憎悪といいますのは、近くの親の言うことというのが一番聞きにくいといえますか、何か言われると、もうそれだけでも気持ちが悪くなるということですね。親の言うことというのは誰も若いときには何となく聞きにくいものですけれども、まさに近親憎悪的な江戸否定の感覚というのが、明治の人にとってのごく当たり前の感覚で

あった。だから明治というのはまさに江戸否定の時代なのです。

そこで明治の人たちが考えたことは、全てを近代的に、そして全て西洋の学問を基本にすることでした。だから今現在でも例えば大学の講座名とか学部の名前とか、全て西洋学が、西洋の学問がベースになっているわけです。文学部というところでもそうです。

例えば社会学、心理学、哲学、歴史学、これは全て西洋の学問をベースにしております。西洋の学問がベースということは、ベシック言語とでもいいますか、「どの言葉によってその学問を勉強するか」ということになりまして、全て西洋言語を材料とする。だから近代の日本人は、西洋言語を本当に一生懸命、勉強をしました。

ですから、現在の九州大学の先生方にしても英語、フランス語、ドイツ語、三ヶ国語は当たり前で修得し、それだけでなくギリシャ語、ラテン語、ロシア語みたいなキリル文字でありますとか、ありとあらゆる西洋言語には皆さん通じておられます。しかし、樋口一葉の書く日本語（崩し字）が読めない。こういう何とも曲がってしまったような状況というのはまさに明治期の江戸否定から出発しているわけですね。西洋言語は大変大事です。非常に大事なことでして勉強しなければいけないことは当然のことですけれども、一方でその持つ異様に大きな落とし穴も考えられます。西洋言語つまり西洋の学問が中心であった問題についても後で申します。

配布資料に「大勢五転」と書いておきましたけれども、そのことについて説明したいと思います（当日配布資料4参照）。私は物事は単純に考えられれば単純に考えたほうがいいと思っております。近代に入って、明治、大正、昭和、そして平成、年号が四回変わっております。しかし昭和は他に比べて少し長く、しかも昭和二十年の敗戦ということがございます。ですから昭和を二つに分けて、明治、大正、昭和戦前、昭和戦後、そして平成、この五回の転機、即ち、日本人の江戸に対する理解の仕方が五回変わったと私は考えております。

明治については先程申しました。大正ということになりますと、明治は四十五年間ですから、四十五歳以下の人は皆もう近代の日本人です。つまり物理的に江戸生まれの人は、四十五歳以下の人にはいない。四十五歳以下の人は近代に入ってからの人です。大半が近代生まれになると、何となく「江戸をただ単に否定するだけではよくないんじゃないか」「江戸的なものを懐古的に趣味的に考えるのはいんじゃないか」というようなことが考えられた。同時に夏目漱石（一八六七〜一九一六）とか森鷗外（一八六二〜一九二二）とか永井荷風（一八七九〜一九五九）とかという様な知識人はみな実際に外国へ行って、外国の近代を十分知って見て帰ってきているわけです。この洋行帰りの日本の知識人たちにとっては「日本

の今やっている、やりかけている西洋風、近代風というのはちょっとおかしいんじゃないか」ということに皆気がつきはじめた。これは実際行ってみないと分からないことですね。行って初めて気がついた。

それから一般的には泉鏡花（一八七三〜一九三九）とか谷崎潤一郎（一八八六〜一九六五）とかいうような小説家たちの「江戸趣味」を肯定する、そういう姿勢が大正に入りますと出てまいります。

そして昭和戦前です。昭和戦前というのは、近代に入ってから明治四十五年と大正十五年、六十歳以下の人は皆、近代生まれです。ということは当時の人口構成からみて、ほとんどの人が近代人ということになってくるわけですね。そうすると江戸から一歩離れるとということができるようになる。つまり江戸をいわば相対的に見ることもができるようになる。相対的に見るということは、まさに学問というものがそこから始まるわけです。江戸を対象にした学問、江戸学というようなものはこの昭和戦前になってようやく始まります。江戸生まれの人が江戸のことを学問的に見るなんてことは、ほとんどできない。やろうとしてもそれは無理な話です。しかし、江戸から離れて「近代人としての江戸」ということになりますと、これは江戸を学問の対象として見ることができるようになる。それが昭和戦前ということだと思います。

そして四回目の昭和戦後。戦後というのはこれは例の敗戦ということがあり、連合国軍最高司令官としてマッカーサーがコーン・パイプをくわえて飛行機から降りてくる。私を含めた我々はそれを具体的に見て、その格好良さにある意味ではしびれたとでもいいますか、そういう世代であるわけです。そうすると戦後、アメリカから持ち込まれたいわゆる戦後民主主義というようなものが、もう実に輝いて見えた。そして「これからの日本はこれでなければいかん」というふうに考えられた。そして女性の社会参加であるとか、あるいは自己実現であるとか、封建制に対する絶対的な反対だとか、そういうことが全て戦後民主主義の大きな柱として我々の目の前に現れて、それをそのまま促進するのが近代化であったわけです。だから近代というのは褒め言葉以外のなものとしても使われたことがなかった。そういう時代が昭和戦後ですね。そして全てが近代主義、つまり西洋主義、西洋文化中心の考え方ということです。

日本の古典、例えば江戸の研究も、先程申しましたように江戸から離れた時機から本格的に始まった。約半世紀前、我々の学生ときがまさにそうだったわけです。そして近代主義から見る江戸の学問は、まずは井原西鶴、近松門左衛門、松尾芭蕉。即ち西鶴のリアリズム。近松のヒューマニズム。芭蕉の俳諧の庶民性が対象となりました。このリアリズム、ヒューマニズム、庶民性、これは全て西

洋文明・西洋文学の批評用語です。江戸の文芸の場合にも、それにあう部分だけをつまみあげて「江戸の中でも西鶴、近松、芭蕉はい。それ以外はもう全部封建主義の残り滓かであり、塊であり、もうどうしようもないものである」というふうにして捨てられたわけです。これは我々が学生のときにいやというほど経験しておりますので、そのことは非常に良く分かります。そうやって第四点目の昭和戦後の時代というのがそういう形で終わります。

そして平成という年号を迎える。この平成という年号を迎えるときに、「本当に近代は手放してそれをほめそやして、賛美してよろしいのか」というようなことが、何となくいろんな世界で湧き上がってきた。例えば二〇〇一年におこった九・一一の背後にあるエネルギー問題。これは中東の石油の問題が一番のきっかけだったと思います。それから昨年（二〇一一年）の三・一一大震災による原子力の問題。そういうものはすべて近代というものが生み出した、人間の手では四十年の間制御できないような危険性というようなものも近代は生み出してしまっていることが分かり始めた。そうなる。「今まで進めてきた近代化はちょっと問題があるんじゃないか」ということになりました。最初はエコロジーの問題から江戸の評価が始まった訳ですけどもその他の分野にも次々と出てきている。

丁度、平成に入ってますね、実は私はこれまで日本国内のことしか分からなかったのですが、私に対して「外国にある日本の書物を調査してくれ」という依頼が、この二十年近く続いています。出かけてみると本当にあるんですね。外国の方に例えば浮世絵関係、あるいは絵本の関係、それも色刷りの非常に美しい歌麿、北斎による作品が本当に山ほどあるんですね。そういう江戸期のものはむしろ外国の方にこそ本方がいいものがある。外国人はそれを美術品として買って帰ってるわけですから綺麗なもの、本当に状態のいいものが沢山ある。日本では逆にそういうものが若干ありすぎたものから、どうしても手垢にまみれた汚いものしか残っていない。

このように私自身、在外の江戸の本を調査するために外国に行くことが非常に増えました。外国に調査へ行く場合、日曜日になりますと調査する図書館が閉まっておりますので、色々なところを観光して回る。サンクトペテルブルグのエルミタージュ美術館（十八世紀エカテリーナ二世の離宮として創建）、あるいはフランスのルーブル美術館（旧王宮、一七九三年以来国立美術館）、あるいはスペインの王宮でありますとか、そういうところを観て回るわけです。観て回りながら、ふっと気がついたのは、全てヨーロッパの十八世紀の封建貴族による建物だということです。封建制の一番の欠点は、まさに権力者が下層民を圧迫して権力で抑えつけてそこからどんど

ん収奪をしたところにあるといわれています。その収奪のかたまりがエルミタージュであり、ルーブルであり、王宮になるわけですね。部屋の数から言っても二千以上、部屋は廊下から天井からいわゆる「きんきらきん」の大変な装飾で固められております。そして部屋ごとによりとあらゆる財宝や美術品が積み上げられている。これは当然国力の違いということでもありますけれども、それにしてもここまで徹底した収奪が行われれば、国民も下層民も権力者に対する反発をおこすのは当然だろうということがよく分かりました。

それに比べて日本の武士が支配した江戸時代の社会体制も「封建制」という言葉でこれまで説明されてこられたけれども、日本の権力者の中にこれだけの収奪をおこなった人がいったどこにいますか。誰一人としてそういうものに値するような人は一人もおりません。日本の封建制と言えば非常に穏やかであり、領主は庶民をできるだけ大事にして、その庶民の生活の成り立つようにする。それが本当の支配者だと説明されてきた。為政者の仁徳を重視して教育されてきたのが日本の封建制です。

ということは結局我々の習ってきた西洋の封建主義と日本の封建主義というのは違うのではないか。色々な意味で明らかに違いがあるのではないかということに、気がつくのが当たり前だろうと思うのですけれども、どういふわけか日本の歴史家でそういうことを説

明してくれた人は私の学生時代、私を知る限りでは一人もありませんでした。つまり、西洋の学問が全て学問のベースであることが明治からずっと続いておりますので、全てに西洋モデルをあてはめているのが現状なのです。要するに封建制といえはロシアモデルの封建制、ヨーロッパモデルの封建制、中国モデルの封建制、そういう諸外国の体制がベースとなる封建制であると。「日本も江戸時代は領主が家臣に封土を与える封建制（或いは郡県制）であった。だから日本の封建制も諸外国と同様であったに違いない」という説明がこれまでずっとされてきたのが実情だろうと、私には思われます。

これも歴史学の方からいえば少しおかしいという説もあるかもしれませんが、少なくとも我々が大学の時に習った封建制というものにはまさにそういうことでした。特に江戸時代は女性が虐げられていた、女性の自立、女性の自己実現・女性の社会参加、全ては封建制によって押さえつけられてきたと、いう具合に説明を受けたものです。

しかし、我々が研究している江戸時代の文化からいきますと、江戸時代ぐらい女性が自己実現をしていた時代は、実はないんです。本当に女性の社会参加、女性の自己実現、全て江戸の庶民はごく当たり前にそれを行っていました。

それに対して封建的つまり権力社会、為政者側は庶民とは全く逆

で、権力社会にいる女性の生き方は大変に窮屈であった。それは確かにその通りだったと思います。従って、これまで言われてきたような「庶民が虐げられてきた」などというような言説はまったく逆であって、むしろ権力者の女性は虐げられてきた。それはなぜかという要するに権力者たるものはやはり権力というものを乱用してはいけない、乱用せずに自己実現ということの反対の言葉、要するに自己犠牲をするのがそれが権力者の立場である、また、権力者自身も自己犠牲を絶対的な倫理として持たなければいけない、そのような倫理観を持っていたわけです。ですから侍階級というのはまさに自己犠牲で成り立っていたのですね。

江戸時代は、戦争の無い時代で、その時代の侍は今で言えば要するに政治家であり、官僚です。ですから政治家であり、官僚である侍が、自己犠牲ということを絶対的な自分の倫理として受け持つ、それを徹底的に子ども時からたたきこまれる、同時に女性達も皆それを絶対的な倫理として自分のものとして考えなければならなかった。そういうことが行われているかぎり、庶民は、つまり今までは虐げられていたと言われていた庶民は、侍に対して絶対的な信頼感というものを持つわけです。

それが江戸時代の本当の姿であるわけですね。ですから、例えば西鶴の作品にしても近松の作品にしても侍に対して、侍を信頼しな



いというような話は全くといっていいぐらい出てまいりません。侍は信頼できるもの。もちろん侍の中にも色々な侍はいます。変な侍というのは当然必ずいるわけです。その変な侍は変だから否定されるわけです。本当の侍、立派な侍に対しては絶対的な信頼をもっていたというのが江戸時代の偽らざる姿であることは間違いないんです。そういうことがやっと平成になって分かって始めてきた。

我々は、平成という時代を迎えて、近代主義というものの大変な危うさが、ようやく分かり始めた。そこで、初めて江戸に対して本当の意味の理解ができるようになってきたというのが実情だろうと私は思います。結局のところ、近現代というものが実情だろうとアンバランスに気付かせてくれた。資料最後のところに「近代文明のアン・バランス」と書きました。要するに世界観、それから人間観、文化観、その全てにおいて現代はそのバランスをかなり危ないところまで崩してしまっている。私どものような江戸の研究をずっとやってきた人間から見ますとそういうことが窺えるのです。

世界観についていいますと、まず時間軸と空間軸。今ほとにかく「グローバル」ということを一番良いことのように申します。グローバルというのは要するに横軸ですね、いわば「空間軸」です。空間軸を広げるということ、それがグローバルということの意味だろうと思います。空間軸を広げるためには確かに外国語ができなければ

よくない。だから色々な外国語ができたほうがもちろんよろしい。しかし世の中は空間軸だけで出き上がっているわけではありません。「時間軸」というものもあるわけです。時間軸ということになりますと、先程から我ながらくどいほど何度も申しあげておりますように、我々は皆ほとんど、日本人の九割九分九厘九毛までが明治三十三年までしかさかのぼれない。それ以上、さかのぼれる人はせいぜい三千人か五千人しかいない、というのが実情なのです。これはやっぱりあまりにもアンバランスである。空間軸を広げることは結構です。どれだけでも広げた方がいい。それと同じだけ時間軸もさかのぼれるように自分をつくっておく。それが日本人としての世界観というものをしっかり持つことだと思えます。本当の意味でグローバルな人であれば、せめて福沢諭吉の『学問のすすめ』、あるいは、松尾芭蕉の『奥の細道』ぐらいいは読めるといのが当たり前であり、同時に外国語も当然できます、というのが結構なことだろうと思えます。

世界観のアンバランスという流れに対して今、私は時間軸と空間軸といたしましたけれども、その話をするときによくクレインに例えてお話をするんですね。クレインの土台の部分、重しの部分ともいいですか、それが私は時間軸というものだと思います。そして、一方でクレインの腕木の部分がいわば空間軸というふうに考えれば



よろしいだろうと思います。時間軸がしっかりしてさえいれば、腕木の部分はどれだけ伸ばしても安心です。どれだけ伸ばしてもひっくり返ることはない。しかし、重しの時間軸の部分がスカスカの場合には、腕木をちょっと伸ばしただけでも必ずひっくり返ってしまう。それが今の日本人の置かれている立場の一つの側面ではなからうかと思えます。

次に、人間観ということですが、これは、求進性と多様性というところで非常なアンバランスが生じてきてしまっている。先程申しました倫理性、要するに役人やあるいは官僚の倫理性のなさといえますか、それが見事にこの数年の間に現れてきている。

江戸時代の侍は、倫理性をすっかり磨くということが何よりの自分たちの立場でありました。従って倫理性をしっかりと持つことによって多様性、個性というものも担保されました。個性、個性と今ではただ個性を磨く、あるいは個性的に考えることが絶対的に大切な事のように言われますけれども、それは多様性をいわば象徴していることだろうと思えます。しかし、倫理性を失った多様性だけの人間というものがいかに自分勝手にいい加減な人間であるかということ、これは現在の役人と政治家を見れば、それは一目瞭然だろうと思えます。

江戸時代の侍は決してそういうことはありませんでした。いよいよ

よとなれば切腹という罰が出てくるわけです。今の政治家や役人でも切腹のようなことは無理な話でしょうが、しかし江戸時代なら切腹ものというようなことが山ほどあるわけですね。しかしそういうことが全く不問に付されているというのが現状であろうと思えます、ですから、人間観のアンバランスというのはまさに倫理性、人間観に生じてくる。

一方で文化観のアンバランスがあります。これは「雅の文化」と「俗の文化」というものが江戸時代には非常にはっきりとありまして、その雅と俗が非常にバランス良く存在した。ところが我々が学生の頃には、江戸時代の文化は元禄文化と化政文化つまり、元禄時代（一六八八〜一七〇四）の文化というのがピークであり、一方で文化・文政時代（一八〇四〜一八三〇）の文化というのがもう一つのピークである、と習った。元禄は十七世紀です。それから文化文政は十九世紀です。そうすると十七世紀と十九世紀にピークがある。その二つをピークだとすれば真ん中の十八世紀はどうしても谷底にならざるを得ない。

しかし、それはちょっとおかしいんではないか、と私は思っています。人間の一生を考えたとき、大体、青年期・壮年期・老年期、分けて考えればいいと思います。普通、その人が最も成熟し、最もはつらつとしているのは、やはり、壮年期だと思います。江戸時代

は十七世紀が青年期、十八世紀が壮年期、十九世紀が老年期と考えられます。ですから江戸時代というのは従来の説明によると結局、青年時代と老年時代にだけピークになって、一番の壮年期は谷底であったことになってしまいます。そういう説明しかこれまでされてきておりませんでした。

私は全く逆に考えております。十八世紀こそ本当に成熟した江戸の文化というものが花開き、江戸的に最も成熟したに違いないということだと思います。これは、江戸文化を一つの人間、三百年生きた人間として考えれば自然に分かることですね。

私は文化というものは、一つの社会体制の中でその社会体制に即応したものが生まれて、育って、そして死んでいくと考えます。そういう形が何度も繰り返し返されたに違いない。だから、平安時代には平安時代の社会体制にふさわしい文化というものが生まれ育ち、死ぬ。中世には中世の社会体制に即したものが生まれ育ち、死ぬ。江戸時代には江戸時代の社会体制に即した封建体制——その封建体制は先程申しましたようにヨーロッパやロシアの封建体制とはだいぶ違った封建体制——があってそれに即応した文化が生まれ育ち、死ぬ。このようなことの繰り返しであったらうと思っております。

また、江戸の文化というのは先程いったように雅と俗という形で

とらえることができます。雅というのは伝統文化です。俗というのは新しく、江戸時代になって初めてできあがった文化です。

伝統と現代、というふうないうと現代の学生さん達は必ずそこで間違ってしまう。何をどう間違うかといいますと、伝統文化というのは要するに年寄りだけがやるものだ。そして新しい文化、現代文化というのは若者がやるものだ。だからスポーツで例えれば、雅の文化というのはいわばゲートボールみたいなものだ。そして俗の文化と言え、サッカー、野球、バスケット、そういうふうな考えてしまうんですね。これは全く違います。

江戸時代というのは雅の文化と俗の文化がどちらも現代文化なんです。だから現代文化の中に雅の領域と、俗の領域があって、そして必ずそれに身分というものがついてまわるわけです。

江戸時代は身分制の社会ですからありとあらゆることに身分があります。文化にも身分があります。雅の文化は上位の身分、俗の文化は下位の身分。ですから何時でも雅が上位にあり、俗は下位にある、というのが江戸時代の人にとってはごく当たり前の感覚であつた。

そして先程申しましたような雅の文化というものが年寄りの、俗の文化は若者のものというような感覚ではなくて、若者も年寄りもみんなが現代文化の中に雅の領域と俗の領域というものを持って、

そしていつでも雅は上位で、俗は下位である、というのが当たり前の世界なんですね。

例えば、演劇の分野でいえば、能と歌舞伎が挙げられます。江戸時代、どちらも現代文化として上演されていましたが、能は鎌倉・室町期からあった伝統文化であり雅の領域。歌舞伎は十六世紀に誕生し、新作が披露される俗の領域に属します。そして、能は武士が観るもの、歌舞伎は庶民が観るもの、というふうに分かれました。

このように江戸時代、雅が上位で俗は下位であるということは当たり前の感覚だったと思って頂いた方がよろしいだろうと思います。

現代は、文化の世界でも雅と俗、即ち伝統的な文化と新興の新しい文化とのアンバランス、つまり新興文化への片寄りがあまりにも強くなりすぎてしまっている。近代文明というのはここまでアンバランスになってきますと、おそらくそのうちひっくりかえるだろうと思います。

それをどうやって止めるかというのは、ここで一度江戸の文化というものを、江戸の文化のありようというものを、一度しっかり考え直してみること。それが非常に重要なことなのではなからうかと、そのように考えております。

最後に現在、仮名文字をほとんどの人が読めない状態に対してどうすれば良いかということをお話したいと思います。

それは、ごく簡単なことで、ベクトルが逆転しているのですから、明治三十三年に導入したことを逆のことは行えば良い。つまり、小学校で「このようなものがありますよ」と崩し字の存在を教える。そして、中等・高等教育で、より深く崩し字を教えれば良いのです。すると三十年も経てば、日本人は、崩し字が読めるようになります。しかし、文部科学省に新たな教育体制を導入してもらうことが時間がかかるかもしれません。いずれにせよ時間が必要だと思えます。そういうことで私の今日のお話は終えさせて頂きたいと思えます。ご静聴ありがとうございました。

〔附記〕

本稿は、平成二十四年十一月十日、本学体育館にて行われた「下関短期大学開学五〇周年記念講演」の録音を元に中野三敏先生に御確認頂きながら適宜、修正・加筆を加えました。

御講演の掲載・資料掲載を御快諾下さいました中野三敏先生、ならびに樋口一葉書簡の掲載（紙面発行のみ掲載）を御許可下さいました山梨県立文学館に対しまして記して深甚の謝意を表します。

（下関短期大学紀要編集委員会）



(二丁表)



(表見返)



一九一

(二丁表)



(二丁裏)

当日配布資料 1 (『見附絵合』表紙 21.2×15.7 cm、中野三敏氏蔵)





(三丁表)



(三丁裏)



(四丁表)



一〇一

(三丁裏)

当日配布資料2 (『見附絵』中野三敏氏蔵)





(五丁表)



(四丁裏)



一二一

(裏見返)



(五丁裏)

当日配布資料3 『見附絵合』中野三敏氏蔵

下関短期大学南序五十周年記念講演

二〇二二年十一月十日

# 江戸文化再考

中野三敏

— 急ぎすぎた近代化への疑問 —

## 従来の江戸観

（江戸時代 一六〇〇年～一八六七年）

・坂本龍馬 江戸観 近代の夜明け

さかもとりゅうま

坂本龍馬 天保六年（一八三五年）慶応三年（一八三六）没。江戸時代末期の志士。土佐郷土現の高知県出身。

薩摩鹿島藩と長州山口の仲を取り持ち薩長同盟を勧め明治維新に影響を与えた。

・福次諭吉風 江戸観 封建制は親の敵

ふくじゆんきち

福次諭吉 天保五年（一八三五年）明治三十四年（一九〇一）没。中津藩士（現伊予大分県出身）。

文久二年（一八六二）江戸幕府使節の通訳としてヨーロッパへ同行。慶応四年（一八六八）蘭学塾である蘭学塾を開設。蘭学塾  
大学の創設者。通訳が記した学問のすすめ（明治四年（一八七〇）初版）三八八～上へ入学進まず入下へ入学進まず入り  
と（一）文が有名は臨時バスツアーになった（初版以来八年で計約七十五冊）。

・御雇い外国人の見た江戸

おやこ

渡邊京二著『逝きし世の面影』一九九八年初版

わたなべきよじ

・御雇い外国人 幕末から明治時代にかけて、欧米の先進技術や学問制を輸入するため雇われた外国人欧米人。

『逝きし世の面影』五十九頁「日本に開国を要求した米国のハリーは番回遣のさい下田現地の静岡屋下田中（に）立ち寄り『ひととほ幸福と満足をつたへてくれた。ハリーの四年後下田を訪れたオズボーンは町を壊滅させた大津波あてもかかわらぬ。再建された下田の住民の『誰もがいなくなる心』がさうである。あつまるよりも、幸せを信じ、いから解放されてくるから面影だ』。

## 大勢五転

一、明治（一八六八年）～一九二二年、明治四十五年＝大正元年

・近親憎悪的江戸否定

きんしんぞうあく

（近親憎悪 親や兄弟など血の繋がりが近い関係にある者あるいは性格の似通った者がお互いに憎みあうこと）

二、大正（一九二二年）～一九五五年、大正十五年＝昭和元年

・知識人の江戸回帰

ちかぬしのかいこ

（夏目漱石、森鷗外、永井荷風）

・一般的江戸趣味

いんげんてんみ

（泉鏡花、永井荷風、谷崎潤一郎）

三、昭和戦前（一九二六年）～一九四五年、昭和二十年八月十五日＝終戦記念日

・学問の対象となる

四、昭和戦後（一九四八年）～一九八八年、昭和六十四年＝平成元年

・近代主義的評価の全盛（俗文化への偏愛）

（近代主義 伝統主義を否定してその中心の文明・科学・技術の進めは文明化の歩みとして評価）

五、平成（一九八九年）～現在

・近代（エネルギー依存症）への懐疑（か）（き）・疑問  
・成熟の始まり（江戸の再評価）

## 近代文明のアン・バランス

・世界観 時間軸と空間軸  
・人間観 求心性（倫理性）と多様性（個性）  
・文化観 雅（ハイ・カルチャー）と俗（サブ・カルチャー）



Web上では非公開ですので、冊子をご覧ください